

第 16 回
専門日本語教育学会
研究討論会誌



2014 年 3 月 1 日 (土)

於：富山大学五福キャンパス共通教育棟 C11 番教室

後援：(公財)日本教育公務員弘済会富山支部

専門日本語教育学会

THE SOCIETY FOR TECHNICAL JAPANESE EDUCATION

第16回 専門日本語教育学会研究討論会誌 目次

1. 留学生のための論文要旨読解支援を目指して
ー理系論文要旨コーパスに基づいた「読む」ための言語情報の抽出ー
細井陽子（早稲田大学大学院生） 2
2. 予備教育課程に在籍する韓国人留学生の理工系専門講義理解に関する事例研究
田中典子（名古屋大学大学院生）、近藤行人（同）、関ソラ（同） 4
3. 日本語教育と数学教育の連携による論理的思考力養成授業モデル
ー日韓プログラム理工系学部予備教育の事例ー
太田亨（金沢大学）、菊池和徳（大阪大学大学院） 6
4. 学習者による‘私の’専門語彙の抽出とリスト化
ー文化・学術専門家日本語研修における「専門語彙」クラスの実践からー
伊藤秀明（国際交流基金関西国際センター）、矢澤理子（同） 8
5. 簿記検定試験に出る漢字の調査 ー商業簿記の仕訳問題に頻出する2字熟語の選別ー
水崎泰蔵（スラナリー工科大学大学院） 10
6. 介護福祉士国家試験に出現するカタカナ語の頻度と傾向
中川健司（横浜国立大学）、齊藤真美（関西国際大学） 12
7. 文章の比較・分析・評価タスクによる日本語ライティング教材を用いた実験授業とその評価
村岡貴子（大阪大学）、因京子（日本赤十字九州国際看護大学） 14
8. 引用から解釈に至る引用文の多様性
ー人文・社会科学系資料分析型論文指導のための基礎的研究ー
山本富美子（武蔵野大学大学院）、二通信子（室蘭工業大学大学院）、
大島弥生（東京海洋大学大学院）、佐藤勢紀子（東北大学） 16
9. 自己PR文を推敲する日本人大学生の修正意図の分析
古本裕子（名古屋学院大学）、近藤行人（名古屋大学大学院生） 18
10. 演習発表型授業でのレジュメにおける問題点の考察
ー留学生と日本人学生のアカデミック・スキルに注目してー
深川美帆（金沢大学）、深澤のぞみ（同） 20
11. 卒業論文作成が論文スキーマ形成におよぼす効果
ー日本人大大学院生による作文の自己訂正の観察からー
山路奈保子（室蘭工業大学）、因京子（日本赤十字九州国際看護大学）、
藤木裕行（室蘭工業大学大学院） 22

留学生のための論文要旨読解支援を目指して

—理系論文要旨コーパスに基づいた「読む」ための言語情報の抽出—

Providing Support for International Students in Reading Academic Abstracts:
Extraction of Linguistic Properties for "Reading" from Science Abstract Corpus

細井 陽子^{※1}

HOSOI, Yoko

キーワード：論文要旨、読解、コーパス

Keywords: academic abstract, reading, corpus

1. はじめに（背景および目的）

日本語で研究活動を行う留学生にとって、先行研究を探して読むことは重要である。文系に比べ、理系専攻の留学生は入試段階で日本語力を求められないケースが多い。しかし、仁科・武田(1991)の理工系留学生を対象とした日本語授業のニーズ調査では「論文・レポートの読み方」の需要が特に非漢字圏出身者に多く見られた。また、筆者が理工系留学生に行った小規模な調査では、専門知識は有するが日本語に不慣れた漢字圏出身者から「論文執筆は英語で行うが、先行研究は日本語でもよく読む」「日本語で調べて読むスキルがほしい」という回答を得たことから、専門文献を「読む」ための支援が必要であると考えた。

近年、先行研究はインターネットの文献検索サイトで調べることが日常化してきた。検索においては、論文タイトルや要旨から情報を読み取り、本文を読む価値があるかどうかを判断する必要がある。文献によってはダウンロードの際に課金される場合もある。要旨を読み、その研究の最も基本的な内容を正しく把握できなければ、研究活動に不利益を被ることは必至である。そこで本研究では、専門知識は有するが日本語に不慣れた留学生が、研究目的や概要紹介の記述を正しく読み取るための支援として、論文要旨における研究目的及び概要紹介の記述に用いられる日本語表現の選好傾向を調査し、分析を行った。

2. 方法

調査対象（表 1 参照）は、学会誌に掲載された論文要旨を保健医療、工学、農学の 3 分野からそれぞれ

表 1 調査対象とした分野，主な雑誌名

分野	主な雑誌名
保健医療	『遠隔医療学会誌』 『癌と化学療法』 『日本在宅ケア学会誌』 『薬剤』
工 学	『土木学会論文集』 A1, C, E, E2, F
農 学	『農業施設学会誌』 『農業機械学会誌』

1,000 ずつ抽出して構築したコーパスである。分野は、日本学生支援機構による『平成19年度外国人留学生在籍状況調査』の結果から、大学院在籍者が多く認められた分野とした。要旨の抽出については、保健医療分野は「医中誌Web」^{注1}、工学と農学分野はJ-STAGEを利用し、着手した時点（2013年5月）で入手できた最新の要旨から過去へ遡る全抽出法で行った。要旨データの整形ならびに分析のための抽出には「サクラエディタ2.0.5.0」を用いた。

このように構築したコーパスに基づき、専門知識は有するが日本語に不慣れた留学生が「読む」という観点から2つの調査を行った。

- 1) 「本研究」という表現を含んだ文を抽出し、研究目的及び概要紹介が記述された文かどうかを目視で分類した上で、それぞれの記述の選好傾向を分析した。
- 2) 「目的」という単語を含んだ文を抽出した。要旨の文中に現れる「目的」は、必ずしも当該論文の研究目的を指しているとは限らない。「目的」が当該論文の研究目的と一致するか否かを目視で分類した上で、双方における言語の使用実態を観察し、学習者が研究目的を読み誤らないための言語情報を探った。

3. 結果および考察

表 2 は、論文要旨の研究目的及び概要紹介の記述

※1 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程 2 年

表2 文の内容による「本研究」の抽出数

分野	医 120	工 535	農 271	計 926
<A>	97(81%)	471(88%)	234(86%)	802(87%)
	23(19%)	64(12%)	37(14%)	124(13%)

<A>と、それ以外の記述における「本研究」の抽出数を示したものである。3分野ともに<A>における抽出率は80%以上であり、両者間にはかなり強い結びつきが認められた。

次に、研究目的及び概要紹介の記述における表現の選好傾向を、文頭形式と文末形式に注目して抽出した結果、以下の3)～9)の文型が顕著に認められた。

()内は、その分野に顕著であったことを示す。

- 3)本研究の目的は～ことである。(医・工・農)
- 4)本研究は～目的とした。(医・農)
- 5)本研究では～行った。(工・農)
- 6)本研究では～検討した。(医・農)
- 7)本研究は～目的としている。(工)
- 8)そこで本研究では～行った。(工・農)
- 9)本研究は～検討した。(農)

また、「本研究」を含んだ研究目的及び概要紹介の全文から複文構造の文を除き、文末動詞の形式を観察すると、「目的としている。」以外は、ほぼ能動態の現在／過去肯定形であった。

以上から、「本研究」や上述の文型を見つけること、文末動詞の形式に注目することで、要旨における研究目的及び概要紹介の記述箇所が特定しやすくなると思われる。

続いて、文中に現れた「目的」が当該論文の研究目的と一致するか否かで分類した結果を表3に示す。一致のみに現れた顕著な文型は10)～14)であった。

- 10)本(研究／論文／稿／報)の目的は～。
- 11)～を目的(と／に)している。
- 12)～を目的とした。
- 13)～を目的とする。
- 14)目的である。

表3 文中に現れた「目的」と研究目的との関係

分野	医 154	工 180	農 211	計 545
一致	112	160	177	449
不一致	42	20	34	96

一致、不一致双方に現れたものは15)～18)であった。

15)～を目的とした～。

16)～を目的とし(て)～。

17)～を目的に～。

18)～目的で～。

15)～18)に相当する文を分析した結果、日本語に不慣れな読み手が読み誤る可能性の高い、不一致の「目的」の現れ方の傾向は、①修飾節内に現れ、抽象度の低い具体的な名詞を修飾している。②述語動詞が受身形や「ている」といった状態を表す形式であることが明らかになった。筆者が留学生の要旨の読み方を調査した際、19)の下線部を研究目的と捉えそうになった事例があったが、今回得られた言語情報の知識があれば、要らぬ迷いや時間のロスは防げたはずである。

19)現在、金属材料の表面の改善、特にメッキ法を含む諸工程においては、耐摩耗性、耐焼き付き性、離型性および耐食性などの向上を目的とした硬質クロムメッキが実施されている。

以上のような「読む」ための言語情報は、日本語に不慣れな留学生が要旨の大意を取り、必要な文献を探す際に有用であると考えられる。「読む」ための言語情報を指導すれば、留学生が既に持っている専門知識や論文要旨の構成に関するスキーマと相まって、読解力の向上が期待できるであろう。

4. おわりに

本稿では「読む」という観点からコーパスに基づいた調査を行った。留学生が専門文献を「読む」ための言語情報に関する研究をさらに進める必要がある。

(yoko.hosoi.lucia@gmail.com)

注

注1「医学中央雑誌刊行会」が作成する国内医学論文情報のインターネット検索サービス。<http://www.jamas.pr.jp>

参考文献

- 1) 仁科喜久子・武田明子：理工系大学における外国人留学生の日本語能力に関する調査分析—東京工業大学大学院課程を中心に—，日本語教育学会，Vol.75，pp.113-123 (1991)

予備教育課程に在籍する韓国人留学生の 理工系専門講義理解に関する事例研究

The Case Study of Pre-university Korean Students' Comprehension of Science and Engineering Lecture

○田中 典子^{※1} ○近藤 行人^{※1} 関ソラ^{※1}
TANAKA, Noriko KONDO, Yukihiro MIN, Sora

キーワード：理工系専門講義、専門語彙、学問語彙、一般語彙、予備教育課程

Keywords: science and engineering lecture, technical vocabulary, high education basic vocabulary, general vocabulary, pre-university education for international students

1. はじめに（背景及び目的）

筆者らが担当している理工系予備教育課程の韓国人留学生は、入学後、日本人学生と同様に日本語で専門講義を受講しなければならない。しかし、講義は専門毎に特徴も異なり、会話とは異なる聴解能力が必要である。この講義理解に必要とされる能力について、平尾(1999)は、話されている事柄を理解するため、専門性の高い背景知識や、情報の重要性や関連性を把握するための高い能力が必要とされること等を指摘している。そこで、本調査は予備教育課程在籍中の韓国人留学生を対象に、理工系専門講義の理解度を調査し、先輩留学生及び専門が異なる日本人学生と比較をすることで、彼らが専門講義のどの点を理解したのかについて明らかにしたい。

2. 調査対象者及び対象講義

調査対象者は、上記課程に在籍中の韓国人留学生 2 名（以下 KJ）で、学習歴 9 か月の中上級日本語学習者である。また、比較対象として、これらの学生に比べ、日本語力が高く、1、2 年次に数学・物理学の基礎科目を受講しており、基礎、専門知識が豊富な工学部 3 年の韓国人留学生 1 名（以下 KS）、日本語力は高いが、専門知識は豊富ではないと考えられる文系の日本人大学院生 1 名（以下 J）に協力を依頼した。彼らには、工学部 2 年生対象の専門基礎科目「統計力学」（連続講義の第 9 回）を聴講してもらった。講義は統計力学の諸原理を学ぶもので、熱力学的諸量の導出に数式の説明が多く行われる。この講義は、教員主導型の形態であり、進学後 KJ

が受講する工学部の専門基礎科目でもあるため、本調査対象の講義とすることにした。

3. 語彙知識に関する調査

3. 1. 語彙知識の調査方法

平尾(1999)は、講義の聴解では語彙力の高い学習者が理解に成功していると指摘する。そこで、講義に関する対象者の語彙知識を測るため、当該講義の語彙知識について被験者自身が「深さ」の段階を申告する Vocabulary Knowledge Scale (Paribakht & Wesche1997)を参考に、講義で使われた語彙 96 語について、どのぐらい知っているかを 4 件法で自己申告してもらった。これにより、調査対象者の各語彙の語彙知識を 1 から 4 点で数値化した。また、調査対象の 96 語は、平尾(1999)を参考に、一般語彙 36 語、学問語彙 33 語、専門語彙 27 語¹に分類し、それぞれの得点の合計を算出した。この得点は、語彙知識の広さに深さの指標を加えた得点であり、本稿では各自の語彙知識が表れたものとする。

3. 2. 語彙知識調査の結果

一般語彙、学問語彙、専門語彙について、それぞれ 100 点換算した合計得点を図 1 に示す。

KS は、講義で使われた語彙について、説明できる段階という得点 4 で回答したものが多く、全ての力

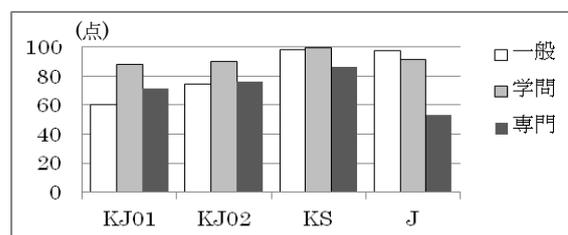


図 1 一般・学問・専門語彙知識の得点

^{※1}名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程

テゴリーの語彙で、得点が高い。

J は、一般語彙は 2 語を除いて全て得点 4 の回答であった。しかし、専門語彙では、講義に出てきた記憶がないという得点 1 の回答や、記憶にはあるが説明できないという得点 2 の回答が半数以上を占めた。学問語彙では、得点 1 の回答や、なんとなく意味がわかるという段階の得点 3 の回答があり、一般語彙より総得点が低くなっている。J は、一般語彙に比べ、専門語彙の知識が少なく一部の学問語彙には深い知識を有していなかったと言える。

KJ01 と KJ02 は得点 4 の回答が学問語彙に多く、一般語彙では、得点 1 の回答が多かった。専門語彙は、KJ01 は得点 4 の回答が 9 語、KJ02 は得点 4 の回答が 17 語あった。KJ は、学問語彙に比べ、専門語彙と一般語彙の知識は少なかったと考えられる。

4. 内容理解調査

4. 1. 内容理解調査の方法

内容理解は、該当回の講義で扱われた概念や背景にある考え方を問うもの 7 問(a)、定理や具体的数値を導出するもの 7 問(b)の計 14 問を作成し、この質問に口頭で答えてもらった。KJ2 名には通訳を同席させ、日本語での説明能力に左右されないように配慮した。解答の評価は、工学部教員のチェックを受けた模範解答を作成し、要点を押さえた正解を 3 点とし、部分的な正解を 2 点、曖昧な要素が多い解答を 1 点、間違っている解答や無解答を 0 点とした。判定は調査者 2 名で協議し、得点を算出した。

4. 2. 内容理解調査の結果

内容理解調査の解答の得点について、日本語力を必要とすると考えられる概念部分(a)と、数学的基礎知識を必要とすると考えられる定理及び数値導出部分(b)、総合得点を示した点数を表 1 に示す。KS の解答は 42 点で、正答率は 100%であった。KJ01 は 26 点(61.9%)、KJ02 は 23 点(54.8%)で、日本人大学院生 J は 23 点(54.8%)であった。KJ02 と J の合

	(a) 21 点満点	(b) 21 点満点	合計 42 点満点
KS	21 (100.0%)	21 (100.0%)	42 (100.0%)
KJ01	14 (66.7%)	12 (57.1%)	26 (61.9%)
KJ02	11 (52.4%)	12 (57.1%)	23 (54.8%)
J	18 (85.7%)	5 (23.8%)	23 (54.8%)

計得点は同じではあるが、(a) (b) の得点内訳は異なっていた。

J は、(a) の得点が 18 点(85.7%)、(b) の得点は 5 点(23.8%)と、概念を説明する(a)の得点が高い。一方、数式を用いる証明が必要な定理及び数値導出を行う(b)の得点は低かった。このような部分は、専門語彙の知識が少なく、一部の学問語彙の深い知識がなかった J にとっては、難しかったと考えられる。

一方、KJ01 は(a) 14 点(66.7%)、(b) 12 点(57.1%)、KJ02 は(a) 11 点(52.4%)、(b) 12 点(57.1%)で、(b)の部分では J より得点が高かった。その一方で、(a)の部分は、J に比べ得点が低かった。数式を理解していたとしても、日本語力を要する概念についての理解は、難しかったと考えられる。

5. 結語

以上より、予備教育課程の韓国人留学生が理工系専門講義を聞く上で学問語彙や専門語彙の知識が、理解に貢献していることが示唆された。その一方で、講義の全体像をつかむためには、日本語力も重要な役割を果していることも示唆された。なお、理解の内容を精査するためには、その解答内容についての質的な分析が今後の課題となる。また、本調査は、教員主導型の数学的知識を必要とする講義の、調査対象者 4 名の講義理解事例である。今後、この事例によって得られた知見が他の事例にも翻訳可能性を持つのかについても検討していきたい。

注

注 1 学問語彙は高等教育で学ぶ語彙¹⁾、専門語彙は講義の指定教科書の索引に挙げられた語彙である。

参考文献

- 1) 国立国語研究所, 高校教科書の語彙調査(1983)(1984)
- 2) 平尾得子: 講義聴解能力に関する一考察: 講義聴解の特徴と日本語学習者が抱える問題点, 日本語・日本文化, 25, pp.1-21(1999)
- 3) Paribakht, T. S. & Wesche, M. : Vocabulary enhancement activities and reading for meaning in second language vocabulary acquisition., Coady, J. and T. Huckin, Second Language Vocabulary Acquisition., pp.174-200. Cambridge University Press. (1997)

日本語教育と数学教育の連携による 論理的思考力養成授業モデル

－日韓プログラム理工系学部予備教育の事例－

A Collaborative Class Model combining Japanese Language and
Mathematics Education for Developing Logical Thinking

- A Joint Japan-Korea pre-Tertiary Educational Program for Science and Engineering Students

○太田 亨^{※1} 菊池 和徳^{※2}

OTA, Akira KIKUCHI, Kazunori

キーワード：日韓プログラム、理工系予備教育、論理的思考力、日本語教育、数学教育

Keywords: Japan-Korea joint program, pre-tertiary education of science and engineering, logical thinking, Japanese language education, mathematics education

1. はじめに：目的および背景

本発表の目的は、2013 年日韓共同理工系学部留学生事業（以下「日韓プログラム」）により来日した韓国入学者入学前予備教育第 14 期生 100 名に対して、2013 年 8 月に実施した日本語教育と数学教育の連携授業から、両者が共通して扱えるテーマとして「論理」を取り上げ、授業過程モデルを示すことである。

日韓プログラム予備教育生に「論理的思考力」を養成すべきこと、そのために日本語教育が数学教育の論証問題解答作成過程と連携すべきことは、これまで発表者らが先行研究で主張してきたが¹⁾、その実践方法については何ら提案できていなかった。

2. 連携授業実践のための導入過程

そこで本研究では、日本語教育と数学教育が共通して取り上げられる課題として「論理」を扱う問題を取り上げ、両者に共通する 4 つの過程を経るタスクを課した。その 4 過程とはすなわち、①日本語の文章を読解させ、②読解した内容を $\forall \cdot \rightarrow$ 等、7 つの論理記号^{注1}を使った表現に置き換えさせ、③問題の真理値（真偽）を判定させて、④真理値判定し

た解答を再度日本語で表現させることである。

「論理」問題を扱うに当たり、日本語教育ではまず、上記①から②の過程を数学の命題を使って演算表現する「和文数訳」²⁾、そしてその逆に論理記号のみで書かれた「数文」を日本語で表現する「数文和訳」²⁾の説明と演習をそれぞれ行った³⁾。

次に数学教育では、集合で用いられるベン図を表の形にした「奴豆腐」という概念の説明を行った⁴⁾。

「奴豆腐」とは、論理演算と同等のものであり、 n 集合のベン図を、 n が奇数の場合には正方形の表 2 個、 n が偶数の場合には正方形の表 1 個の形にして、上記②と③の過程を鳥瞰的に視覚化し効率的にしたものことで、例えば図 1 の左側は $n=2$ の場合の「奴豆腐」である。

3. 連携授業実践および連携の方法

授業では「課題 1」として、「公園に子供たちが集まっています。男の子も女の子もいます。よく観察すると、帽子をかぶっていない子供は女の子です。そして、スニーカーを履いている男の子は一人もいません。」という報告から、「(1)男の子はみんな帽子をかぶっている。」、「(2)帽子をかぶっている女の子はいない。」、「(3)帽子をかぶっていて、しかもスニーカーを履いている子供は一人もいない。」という 3 つの命題の真偽を問う問題を課した^{注2}。

次に「課題 2」として、「(a)魚の好きな猫で言うことを聞かない猫はいない。」、「(b)尾のない猫はゴリラと一緒に遊ばない。」、「(c)ヒゲのある猫は必ず魚が好きだ。」、「(d)言うことを聞く猫で緑色

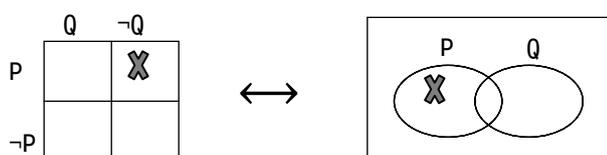


図 1 $n=2$ の場合の「奴豆腐」とベン図

^{※1} 金沢大学国際機構留学生センター教授

^{※2} 大阪大学大学院理学研究科講師

の眼をしている猫はいない。」、「(e)ヒゲがないのに尾がある猫はいない。」という5つの条件から、「(1)「ゴリラと一緒に遊ぶ猫は緑色の眼をしていない」が真であることを示せ。」と「(2)「魚が好きで、しかもヒゲがない猫は…」が真となるような結論部分「…」を求めよ。」という問題を課した^{注3}。

これら2つの課題に対し、日本語教育の立場から、まず導入過程で示した「和文数訳」を入念に行わせ、ド・モルガンの法則等を使って数文を変形した上で、命題の真偽判定や、得られた解答の数文をどのように和文に復元するかの課題を行わせた。

一方、数学教育では、日本語教育授業で得られた数文を「奴豆腐」でどのように視覚的に表現できるかを解説し、数文と「奴豆腐」との論理表現の関係や両者の違いについて考察を行った。

そして最後に、日本語教育と数学教育が連携して、「和文」 \leftrightarrow 「数文」 \leftrightarrow 「奴豆腐」が論理的に「同値」であること、最終的にはこれら3つに加えて韓国語での表現を含めた、4つの表現方法の間を「自由に往来できるようにする」ことを目指すよう指導した。

4. 連携授業過程モデルの提示と今後の課題

前節で述べた授業実践および連携の仕方をフローチャートにしたものが下の図2である。

図中の分岐した部分は、授業で日本語教育と数学教育が各々独自に解説を行った部分だが、今回のように「同値であること」を共通軸に、同じ問題についてそれぞれの立場で取り組みながら、連携した授

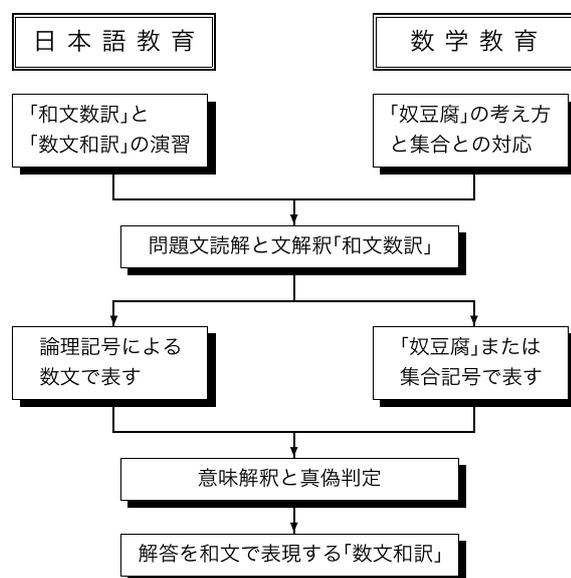


図2 「論理」を扱った連携授業過程モデル

業を行うことが可能であることが分かったと言える。また、図中の一本化した部分は、日本語教育と数学教育が連携して扱った箇所だが、「論理」表現を豊かにするという観点からは、日本語教育単独の課題として十分に扱える内容であることも実感した。

しかしながら、今回の連携授業では、「和文数訳」と「数文和訳」、「奴豆腐」そのものの演習に割ける時間が十分確保できなかったこと、また日韓プログラム予備教育生の「論理的思考力」養成にどの程度寄与したかについて十分把握できなかったことが課題として残された^{注4}。さらに加えて、「論理的思考力」養成へ向けて、「論理」以外のテーマで日本語教育と数学教育が授業連携できるかの可能性についても探る必要があると考えている。

(akirao@staff.kanazawa-u.ac.jp)

付記：本研究は、科学研究費補助金「日韓プログラム予備教育における「日韓共同（協働）教育」を目指す実践的研究」（課題番号：24320093、研究代表者：太田亨）の助成によるものである。

注

注1 ① $\neg A$ (Aでない)、② $A \wedge B$ (AかつB)、③ $A \vee B$ (AまたはB)、④ $A \rightarrow B$ (AならばB)、⑤ $A \leftrightarrow B$ (AはBと同値である)、⑥ $\exists x(\dots)$ (...を満たすxが存在する)、⑦ $\forall x(\dots)$ (すべてのxについて...)

注2 出典は、日本数学会教育委員会が2011年に実施した「大学数学基本調査」の間1-2を微調整したものである。

注3 出典は、『不思議の国のアリス』の著者で、数学者・論理学者の Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) による論理の教科書からで、原文は英文である。

注4 日本語教育の後で、「和文数訳」等の難易度の感じ方を問うアンケート調査を行ったが、「難しいと感じず解答できた」と答えたにもかかわらず、解答した数文が不完全な例が多く見られた。

参考文献

- 1) 太田亨, 村岡貴子: 韓国人理工系学部入学前予備教育生の日本語による学術的文章の読解と作成に関するレディネス調査, 第15回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.18-19 (2013)
- 2) 新井紀子: 数学は言葉, 東京図書 (2009)
- 3) 長谷川貴之: 国語式数学II, サイエントリスト社 (2006)
- 4) 大西泰斗, 菊池和徳: えいごとさんすういっしょにわかる -リレー連載 第10回, NHK テレビ3ヶ月トピック英会話テキスト1月号, pp.72-81 (2009)

学習者による‘私の’専門語彙の抽出とリスト化

—文化・学術専門家日本語研修における「専門語彙」クラスの実践から—

Learner's Making 'my own' List of Specialized Vocabulary:

From the Practice of Japanese Language Program for Specialists in Cultural and Academic Fields

○伊藤 秀明^{※1} 矢澤 理子^{※1}
ITO, Hideaki YAZAWA, Michiko

キーワード：専門語彙、質的な抽出、リスト化、カテゴリ分類、Web ツール

Keywords: specialized vocabulary, qualitative extraction, listing, categorized, Web tools

1. 問題背景と目的

事例の専門日本語コースは、国際交流基金関西国際センターの提供する文化学術専門家日本語研修 6 ヶ月コースで、大学院生、研究者、司書、学芸員を対象としている^{注1}。研修の参加者は研究活動及び専門業務上、日本語の習得を望む者であるため、研修では各自の資料読解や成果発信等を支援する授業が行われている。しかし近年、基礎となる専門語彙の知識不足により論文読解や発表原稿執筆に支障をきたす事例が少なからず見受けられ、専門語彙の習得が課題となっていた。そこで、2013 年度の本研修では、新規科目として「専門語彙」を開講することとした。だが、研修参加者の専門は文学・人類学・民俗学・法学・経済学・美術史学など多岐にわたり、門外漢の日本語教師が習得すべき語彙を選択・特定することは困難である。たとえ語彙が特定できても、クラスで同時に各人がそれぞれの専門語彙を学ぶことは容易なことではない。そこで、学習者自身が各自の専門文献から語彙を抽出し、体系化し、リストシェアリングにより語彙の習得を図る学習者主体、自律学習型のクラス形態学習をデザインし、実施した。本稿では、この授業実践について報告する。

2. 「専門語彙」の授業

「専門語彙」の授業は、受講者数 11 名、週 1 回 100 分の授業で 8 回、6 ヶ月コースの前期に提供した。研修では、6 ヶ月という短い期間で自身の設定した特定研究課題について研究取材をすすめ、成果報告をしなければならない。そのため、研修前期に

行われる「専門語彙」の授業では、研修生が自身の研究に即戦力として使える専門語彙を効率的に学ぶ必要がある。さらに、「専門語彙」の授業後も研究は続くことから、自律的な学習を促し、後期においても各自で専門語彙の習得を行っていきける能力を身につけることも必要となる。そこで、「専門語彙」では自身の研究に必要な専門語彙リストの作成法の習得と現段階で自身に必要な専門語彙リストの作成を目的とし、以下の流れで授業を行った。

①語彙抽出元となる各自の専門文献を Web 上で検索し、特定

②東京大学開発の Web サイト「言選 Web」^{注2}を使用してキーワードを抽出し、Microsoft Office Excel(以下、Excel)でリスト化

③自身の専門知識に照らし合わせてキーワードの削除・カテゴリ分類など行いつつ、各自の専門語彙リストを作成

また、語彙の体系化と定着のために、上記③のリスト作成作業と並行して適宜、マッピング作業や研修生同士によるシェアリング活動を導入した。

次節では各手順について詳しく説明する。

2.1 基本資料

本授業を行う上で一番の課題となるのが、研修参加者が必要とする専門語彙が個人によって異なることである。しかし、各人が自身の専門から専門語彙を学べる環境が整えば、この問題は解消される。そこで、まず、各自読みたいと思う専門文献を Web 上から選ばせた。自分の研究にとって優先度の高い専門語彙を抽出するためには、研究に必要なテキスト

^{※1} 国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員

トを的確に選ぶことが必要となるが、研究進度の差によりテキスト選択が難航する場合も見られた。妥当かつ有用なテキストの選定は重要なアカデミックスキルであり、クラスのこの作業がスキル訓練の場となる。また、自分でテキストを選ぶ責任を持つことで研究の自律性が養われる。

2.2 キーワードの抽出・リスト化

キーワードの抽出に関しては、東京大学開発のWebサイト「言選 Web」を使用した。このサイトは利用者が入力したテキストやWebサイトのページ(URLの入力のみ)、Word、PDF ファイルなどの文書内からキーワードを抽出し、一覧にして表示するサイトである。また、このサイトの優れている点は、他の語と結びついて複合語になることが多いほど、キーワードの重要度が高いと判定され、キーワードを抽出する際に、自動的に重要度が付加される点にある(図1)。このようにして抽出されたキーワードをExcelに移し、自身の選んだ専門文献のキーワードをリスト化した。

2.3 自身の知識に合わせた専門語彙リストの作成

キーワードをリスト化したものを研修生自身の知識に合わせ、削除・整理させた。特に読み方がわからない漢字語彙に関しては、Excelの関数を利用して振り仮名を振る作業を行った^{注3}。また、語彙の辞書的な意味への置き換えに終わらせず、用法における発見を促すため、カテゴリー名を付加させ、フィルターをかけることによって、カテゴリー分類による表示ができるようにした。このように自身の研究に合わせたカテゴリー分類を行うことで、例えば、建築記号論を専門とする研修参加者は建物の「材

料」を「情報システム」の一要素として分類するなど、辞書的な意味とは異なる自身の専門語彙としての意味用法への気づきが見られた。

2.4 研修生同士のシェアリング活動

各自個別のリスト作成作業に差し挟む形で数回行った各自キーワードのマッピング、作成中のリストのシェアリングは、語彙の体系化、習得強化を刺激する仕組みであり、自身のリストには現れなかった関連語彙を学んだり、分野毎の意味用法の違いに気づいたりするクラス協働学習の場として機能した。

3. 本実践でみられた特色

本実践では以下の3点の特色が見られた。

まず一点目は、本実践では専門語彙の抽出を大量の論文や資料から抽出するのではなく、自分自身の興味のある、または自分自身に必要な論文・資料からキーワードを抽出したため、自身の研究に即戦力となる専門語彙のリストを短時間で作成することができた。次に二点目は、リストを意味の置き換えで辞書的に作成するに留まらず、カテゴリー分類することで、専門語彙としての意味と用法への気づきが生まれた。そして三点目として、手法の汎用性が挙げられる。「言選 Web」「Excel」など既存のツールを活用してリスト作成を行ったため、どこでも応用実践が可能である。また、PC データとしてリストを作成したため、学習者が暗記用の他の学習リソースに転用しやすいものとなった。

以上のように特色ある実践が行われた一方、定着に関しては定着の様子を確認したのみで、詳しい調査は行っていないため、今後の課題としたい。

(Hideaki_Ito@jpf. go. jp)

注

注1 本研修は、日本語能力試験 N4 以上または旧日本語能力試験 3 級程度以上の日本語力を応募要件としている。

注2 「言選 Web」(<http://gensen.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gensenweb.html>) (最終閲覧日 2014 年 1 月 13 日)

注3 空欄のセルを指定し、「=PHONETIC(セル番号)」を入力すると、指定したセル番号の文字列の振り仮名を表示させることができる。

日本	79.37
国際交流基金	82.61
独立行政法人	80.25
日本語	52.44
法人	28.28
日本研究	23.53
開発	20.12
日本語教育	19.37
日本語国際センター	19.04
独立行政法人国際交流基金	18.81
国際協力機構	15.34
特定独立行政法人	14.84
研究者	13.17
関連項目	12.89
外務省	12.25
日本語学習者数	11.48
編集	11.00
関西国際センター	10.45
国際交流	10.44
事業	10.39
海外	10.00
国際文化交流	9.99
アジア	9.80
ページ	9.49
文化	9.17
施設	8.94
サイト	8.66
国立国際医療研究センター	8.26
開発者	8.03
科学技術振興機構	7.92
国際環境	7.88
産学技術総合開発機構	7.83
国際文化交流事業	7.67

図1 キーワードと重要度の抽出

簿記検定試験に出る漢字の調査

— 商業簿記の仕訳問題に頻出する 2 字熟語の選別 —

An Investigation of Kanji on The Official Business Skill Test in Book-Keeping:

Select Useful Kanji Idioms which Appear on Journalizing Test Sentences of a Commercial Book-Keeping

水崎 泰蔵^{※1}

Taizo MIZUSAKI

キーワード： 簿記検定、2 字熟語、複合語

Keywords: The Official Business Skill Test in Book-Keeping, Japanese Kanji idioms, compound words

1. はじめに

日商簿記検定は 3 級だけでも毎回約 10 万人が受験しており、日本語非母語話者（以下外国人）が合格した事例もある。一方、在外日系企業の数には日系企業の簿記会計部門の数でもあり、日本の簿記会計知識のある専門職の需要は高い（水崎 2012）。本研究は外国人向け商業簿記日本語に関する調査報告であるが、特に日商簿記検定 3 級仕訳問題（以下簿記検定）に出現する漢字を調査したものである。漢字からなる語彙を選別し、経営学部等の日本語学習者を対象に、簿記検定向け漢字学習の効率を向上させることを目的とする。

2. 先行研究

外国人の簿記検定合格例については記録はあるものの（中部学院大学 2012 他）学術報告はされていない。簿記分野ではなく、医学、介護分野の外国人向け公的資格試験向け漢字研究はある。中川（2010）は、漢字を適切に選択することによる学習の効率化について述べている。また簿記専門家の立場から国田（2012）は、原則漢字のみが用いられる簿記専門用語について、外国人の問題文を読む力の不足を指摘しているが、優先して学習すべき語彙の選別には至っていない。

両者の共通の指摘は、漢字の攻略であるが、簿記検定における外国人学習者向けの漢字からなる語彙の選別は、どのような手法が有効であるのだろうか。

3. 方法

本研究では簿記検定の過去問、第 130～134 回の計

5 回分（以下過去問）の中で出現する漢字の調査を行った。漢字調査は、①日本語能力試験（以下 JLPT）に出題される漢字との比較、および、②簿記検定特有の漢字の傾向の 2 つからなる。そのうえで簿記検定を受験する外国人が優先して学習すべき「簿記検定対策漢字表」（以下漢字表）の作成を試みた。作業は Excel の Find 機能を使って検索を行った。

まず JLPT に出題される漢字であるが、過去問における出現漢字数は 144 字であった。内訳は N5 で 25 字、N4 で 35 字、N3 で 49 字、N2 で 19 字、N1 で 16 字にとどまる（各級とも異なり漢字数）。JLPT に出題される漢字を中心に学習した場合、簿記検定で出現する漢字数は少なく学習効率が悪い。

次に簿記検定特有の語彙について述べる。

過去問ではどのような漢字が出現するか、第 1 段階として過去問から「漢字を含む延べ語彙」を抽出する作業を行った。例えば「支払期日が到来したため、元利合計を当座預金から返済した」という問題文から、「支払期日／到来／元利合計／当座預金／返済」のように抽出作業を行う。抽出された「漢字を含む延べ語彙」は 372 語であった。このうち漢字だけでなる「円／銀行／減価償却費」等の語彙が 323 語、送り仮名を必要とする「預け入れた／引き落とされた」等の語彙が 41 語、「6 か月／80 日分」等の数字を含む語彙が 8 語という内訳であった。この結果をうけ、漢字だけでなる語彙を選別していくことが簿記検定問題文読解の効率を高めると考えた。

過去問から抽出された「漢字を含む延べ語彙」372 語に対して「漢字を含む異なり語彙」は 190 語であっ

※1 スラナリー工科大学大学院外国語研究科専任講師

た。この190語のうち過去問における「複数回出現する語彙」は70語であった。「複数回出現する語彙」70語は、簿記検定受験者が優先して学習すべき語彙であることは間違いないが、漢字からなる語彙について国田は「貸倒引当金」等の語彙の読解に時間がかかると指摘している。そこで、抽出した過去問の語彙のうち、漢字からなる複合語（以下複合語）について調べた。

「複数回出現する語彙」70語の一方で、過去問で「1回のみ出現する語彙」は120語あるが、この2つのグループの語彙には「取引銀行／取得原価」等の複合語が51語含まれていた。複合語を漢字2字からなる熟語（以下2字熟語）に分解することで、「銀行／原価」のような2字熟語を通じて、複合語を部分的にでも読み解くことができるのではないかと考えた。そこで第2段階として、例えば「当座預金」等の複合語を「当座」と「預金」のように分解してみた。「当座預金／預金口座」を例にあげると、「預金」という2字熟語が重複している。これらの延べ2字熟語を異なり2字熟語に集約した結果、「主に2字熟語からなる漢字を含む異なり語彙」は163語となった。この163語のうち過去問における「複数回出現する語彙」は、89語であった。

これを受け第3段階として、これらの「主に2字熟語からなる漢字を含む異なり語彙」163語を漢字表に集約した。このうち2字熟語は116語であった。ただし、すべての複合語を2字熟語にすることが、ただちに読解の効率を高めるわけではない。2字熟語に分解しても出現頻度が増えない例もある。「固定資産／裏書譲渡」等の語彙は、複合語として過去問で複数回出現している。これらの複合語としてとどめた語彙は10語あった。その他「買掛金／従業員」等の3字熟語が19語、漢字1文字が5字、送り仮名を必要とする語彙が8語、数字を含む語彙が5語という内訳となった。

4. 結果および考察

過去問から抽出された「主に2字熟語からなる漢字を含む異なり語彙」163語に出てくる漢字のレベルは、JLPT出題漢字のうち、N5～N3が109字であるのに対してN2～N1は35字であることから、初中級レベルであると言える。「基礎医学術語中の出現漢字の級別

頻度一覧」(中川2010)と比べても、簿記検定に出る漢字のうちN2以上の割合は低い。

漢字表のうち、主な語彙と過去問における出現頻度の結果が表1である。漢字表の有効性について、簿記

表1 漢字表

上位7語	頻度
円	45回
代金	28回
商店	18回
支払	12回
現金	11回
借入／預金	9回

検定第135、129、128回問題（以下3回分）を使って検証した。分母となる3回分の「漢字を含む延べ語彙数」は順に87語、76語、77語である。漢字表の語彙の出現割合と出現頻度は、第135回は80.4%/70回、129回は75.3%/58回、128回は83.1%/64回に達した。漢字表の語彙がJLPT出題漢字と比べると、割合・頻度ともに高いことが確認された。しかし「前年度／売掛金」等、漢字表にはない語彙だが、3回分の中で複数回出現する語彙もあった。調査対象を広げることで、漢字表の語彙の出現割合を高められる可能性を示しており、課題として残した。

5. おわりに

漢字表が商業簿記向け漢字学習に活用できることが明らかになったが、工業簿記や原価計算等の分野における漢字調査も必要であり、今後の課題となった。

(taizo03mizusak@sut.ac.th)

参考文献

- 1) 国田清志：専門科目教育にかかわる留学生の日本語教育，人文科学年報第42号，専修大学人文科学研究所，pp.61-74（2012）
- 2) 中川健司：基礎医学術語を学ぶ上で優先的に学習すべき漢字の選定の試み，日本語教育145号，pp.61-69（2010）
- 3) 中川健司：介護福祉士候補者が国家試験を受験する上で必要な漢字知識の検証，日本語教育147号，pp.67-80（2010）
- 4) 中部学院大学：留学生が日商簿記検定3級に合格，<http://www.chubu-gu.ac.jp/>（2013年7月5日閲覧）
- 5) 水崎泰蔵：日本語による会計学実践報告，第14回専門日本語教育学会研究討論誌，pp.22（2012）
- 6) Nouben: Kanji Lists, <http://www.nouben.com/>（2013年9月30日閲覧）

介護福祉士国家試験に出現する カタカナ語の頻度と傾向

The Trends of Katakana Words which Appear in State Examination for Certified Care Workers

○中川 健司^{※1} ○齊藤 真美^{※2}
NAKAGAWA, Kenji SAITO, Mami

キーワード：介護福祉士国家試験、カタカナ語、語源

Keywords: State Examination for Certified Care workers, katakana words, word root

1. はじめに（背景および目的）

EPA（経済連携協定）候補者の介護福祉士国家試験（以下国家試験）受験において介護用語の習得が大きな鍵となるが、日本語教育において介護分野の用語を対象とする研究はこれまで漢字語彙の研究が中心であった。水本他¹⁾が指摘しているように、専門分野によっては「カタカナ語を克服しなければ専門教育を受ける上で困難である」場合があり、介護分野のカタカナ語についても調査が必要であると考えられるが、現状では中川²⁾等に限られ、決して十分とは言えない。中川²⁾では介護専門用語を調査対象としているが、実際の国家試験では、介護利用者の日常生活について問う問題が少なくなく、介護専門用語ではないカタカナ語も多く用いられるため、介護専門用語にとどまらず、国家試験に出現するカタカナ語全体に関する研究が必要である。そこで、本研究では、第 14-25 回の国家試験に出現したカタカナ語を対象にその頻度と傾向を調査した。

2. 国家試験中のカタカナ語の頻度と傾向

2. 1 国家試験中のカタカナ語数及びレベル

本研究では、「居宅サービス計画」のようなカタカナ表記を含む語を「カタカナ語」と呼び、同語中の「サービス」のようにカタカナ語中のカタカナ表記の構成要素を「カタカナ構成要素」と呼ぶ。なお、カタカナ語には、「インテーク」のようにカタカナ構成要素のみからなるものと、「ウイルス性肝炎」のように漢語等、他の構成要素と結びついて 1 語になっているものがある。

第 14-25 回の 12 回の国家試験において、延べ 2725 語（1 回平均 227.1 語）のカタカナ語が用いられ、カタカナ語が出現する問題は 1 回の試験あたり 120 問中 81.3 問と全体の約 3 分の 2 を占めていることから、カタカナ語が国家試験の内容の内容理解に少なからず影響することがうかがえる。2725 語のカタカナ語は異なりで 635、延べで 3014 のカタカナ構成要素に分けられるが、旧 JLPT のレベル別にみた場合、構成要素の 74.5% が級外に分類されるものであり、一般的な日本語教育ではカバーできず、介護分野に特化したカタカナ語指導が重要だと言える（表 1）。

2. 2 出現頻度の高いカタカナ構成要素

出現頻度上位 10 語中 8 語、上位 20 語中 12 語が 2～4 級の語彙であり、頻出するものの中には一般的な日本語教育で扱われるものも少なくない（表 2）。しかし、「サービス」のように一般的な意味合いとは異なる用いられ方をする場合もあり注意が必要である。また、出現回数が少ないものの中にも「親しみを感じさせるために名前をチャン付けて呼ぶ（第 23 回 32 番）」の「チャン」のように問題を理解する上での鍵となるカタカナ構成要素もあり軽視できない。

表 1 カタカナ構成要素の旧 JLPT レベル

	異なり		延べ	
級外	473	74.5%	1511	50.1%
1 級	41	6.5%	124	4.1%
2 級	74	11.7%	1081	35.9%
3 級	28	4.4%	98	3.3%
4 級	19	3.0%	200	6.6%
	635	100.0%	3014	100.0%

※1 横浜国立大学准教授 ※2 関西国際大学非常勤講師

表2 カタカナ構成要素（出現頻度上位10位）

	旧 JLPT		出現頻度
1	2	サービス	327
2	2	レクリエーション	135
3	級外	ケア	76
3	4	ベッド	76
5	級外	リハビリテーション	74
6	2	コミュニケーション	72
7	2	センター	71
8	4	トイレ	67
9	2	グループ	64
10	2	ホーム	49

3. カタカナ構成要素の語源について

カタカナ構成要素 635 のうち、人名、地名を除いた 564 を語源別で見ると、英語語源のものが 84.6% で最も多く、以下、和語 (3.5%)、ドイツ語 (3.2%) と続く。英語を解する候補者にとっては理解の手掛かりになる可能性があるが、和製英語のものも 2.3% と少なくないため、注意が必要である。

4. 介護専門用語との重なり

前述のように国家試験ではいわゆる介護専門用語ではないカタカナ語も多く用いられるが、出現頻度上位 20 位までカタカナ構成要素について言えば、そのほとんどが中川²⁾で扱った介護専門用語と重なっている (表 2)。100 位までのカタカナ構成要素に着目すると、以下の a)~d) が中川²⁾にはないもので、国家試験に一定数出現するものである。

a) 旧 JLPT 範囲内の一般的に用いられるカタカナ語：メンバー、プログラム、ゲーム

b) 成分名：ナトリウム、カルシウム、カリウム

c) 疾病関連語：ウイルス、ビブリオ

d) 利用者の日常生活関連語：マット、ゲートボール
これらのうち a) に関しては一般的な日本語教育でカバーできるものもあるが、b) c) d) については、介護の周辺的な範囲の語彙であるため、学習指導において見落とされる可能性がある。

5. 候補者にとって理解しにくいカタカナ構成要素

発表者の一人 (齊藤) が担当している、EPA 候補者対象の国家試験対策での指導の経験から、国家試験で用いられるカタカナ構成要素の中では、以下の①~⑤が候補者にとって理解が難しいものとしてあげることができる。①和語をカタカナ表記したもの (カビ、ダニ) ②英語のものとの意味と異なり、介護分野で特定の意味を持つもの (アドボカシー、エンパワメント)、③政策名として考案され、語の意味が内容を反映していないもの (ゴールドプラン)、④英語の原義と近いが、用語が長く、表記上理解しにくいもの (インフォームド・コンセント、パーソナルネットワーク)、⑤英語と発音が異なるもの、または英語語源ではないもの (カルシウム、カリウム) が挙げられる。他に、「ノーマライゼーション」のように語の基本的な意味だけでなく、その理論的な背景を知っていなければならないものもある。

6. おわりに

時間的制約から、語彙学習のかなりの部分が候補者の自律学習となっている現状を考えると、学習効果を上げるためにも指導者自身は候補者にとって理解が難しい語彙に焦点を絞って指導するべきであろう。そのためにはカタカナ語がどのようなタイプのものであるのか理解し、指導する必要がある。

(kaigokanji@gmail.com)

付記：本発表は、科学研究費補助金・基盤研究(C)『EPA 介護福祉士候補者を対象とした国家試験受験に向けた漢字学習ウェブサイトの開発』(代表者中川健司 24520581) の研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 水本光美・池田隆介・平山義則・福田展淳・孫連明・李丞祐：カタカナ語を含む専門用語の特徴—環境工学系「純粋専門語」の調査と分析—, 専門日本語教育研究, 第7号, pp.35-40 (2005)
- 2) 中川健司：科目別介護用語におけるカタカナ語の様相, 第15回専門日本語教育学会研究討論会発表要旨集, pp.10-11(2013)

文章の比較・分析・評価タスクによる日本語 ライティング教材を用いた実験授業とその評価

Experimental Class and Evaluation of Japanese Academic Writing Using Text-Analyzing Tasks

○村岡 貴子^{※1} 因 京子^{※2}
MURAOKA, Takako CHINAMI, Kyoko

キーワード：ライティング教材、文章分析タスク、実験授業、学習方法、授業評価

Keywords: academic writing materials, text-analyzing tasks, experimental class, learning method, class evaluation

1. 本研究の背景および目的

本発表の目的は、筆者らが開発した日本語ライティング教材を用いて海外の大学に学ぶ大学院生を対象に行った実験授業と、当該大学院生へのアンケート調査の結果をもとにして、同教材で提案したライティング学習方法の有効性を検証し、上記の授業実践を評価することである。

筆者らは、論文スキーマという概念を用いた授業実践や学習成功者への調査分析から、論文スキーマ形成の支援を目的とするライティング教材『論文作成のための文章力向上プログラム』（大阪大学出版会, 2013）¹⁾を開発した。論文スキーマとは、論文や研究とは何かについての知識の総体を示す²⁾もので、同スキーマを持つ学習者は、文章の局所的な文法や表現にとらわれずに、文章の構成や論理展開を正確に把握し、かつ、ライティング学習と自身の研究活動を有機的に結び付けるメタ的な視点を有する。

同書は、研究コミュニティへの新規参加者が、文章ジャンルの差異を意識し、文章の目的・読み手・媒体を考慮して内容・構成・表現の選択が行えるようになること、すなわち研究活動に必須のメタ認知的な視点を内在化し、その視点からの判断により文章作成技能を向上させることを目的としている。その目的達成のため、同書は、論文やレポート、報告書や通信文等、研究活動を支える種々の文章を他者と協働的に比較・分析・評価するタスク活動と執筆練習活動、および各タスクに関する解答例を含めた

^{※1} 大阪大学国際教交流育センター教授

^{※2} 日本赤十字九州国際看護大学看護学部教授

解説書である別冊を提供している。

本発表では、2013年10月と11月に台湾の2大学で合計24名の大学院生（修士課程）を対象に、本教材を用いて行った各90分の実験授業の概要、および授業実施後のアンケート調査の結果分析を報告し、本教材と授業に関する評価について考察する。

2. 実験授業の概要

授業では、まず、文章力向上のための学習方法についての意識化を図る目的で、プレゼンテーションソフトウェアを用いて講義を行った。講義では、論理的ではない複数の文章の実例とその分析、文章の論理性を支える諸条件を提示した。この講義に続いて、本教材の2章分からの複数タスクを抜粋した配布資料を用いて、各3名程度の小グループによる文章分析活動を行った。具体的には、200字程度の報告書とレポートの各一部を抜粋した文章例を素材として、1) 事実の分析や意義付けの解明、2) 結論までの一貫性の検討、3) テーマは同じであるが異なる表現方法と構成を持つ複数の文章を比較・分析・評価するタスクである。これらのタスク実施後に、各グループからの検討結果の報告を促して授業内で共有し、質問を受け付け、最後に、授業担当者による解説を行った。

3. 実験授業後のアンケート調査の概要と結果分析

3.1 アンケート調査の概要

上記授業の終了後、学習者に対し、中国語に翻訳したアンケート用紙を配布して調査を行った。質問

項目は、授業および教材内のタスク活動への評価に関するもので、次の①から⑦の項目を4段階（①の例：深まった、ある程度深まった、思ったほど深まらなかった、深まらなかった）で尋ねた。各回答の理由とタスク経験後のコメントも自由に記述するように求めた。

- ① タスクによる文章作成への理解度
- ② 文章の比較評価による文章作成への理解度
- ③ 分析やリバイズに手間をかける価値
- ④ 分析やリバイズの自己学習の可否とその理由
- ⑤ 教材の解説の有用性
- ⑥ 素材文としての文章のレベルや内容の適切性
- ⑦ 上記タスクを今後授業で行う希望の有無

補助者に調査票の回収を依頼した結果、24名全員から回答が得られ、分析したところ、参加者全員から、本ライティング教材の提供するタスクによる授業活動は、有用で価値があるという判断が示された。また、23名の参加者から、こうした訓練を授業活動として行いたいという強い希望と意欲が示された。以下、自由記述分も含めて主な回答結果をまとめる。

3.2 タスクが文章理解と作成に与える効果

文章の分析、比較、評価活動を含むタスクは、次の1)から3)に示す学習者コメントの通り、文章の理解と作成には、字句や局所文法より文章の構成や論理展開といった重要な点が存在することへの理解を促し、かつ、それら重要な点が読み手への配慮に直結する効果をもたらすことに対しても認識を深めた。

- 1) 今回の活動は、ロジックの練習にとって助けになった。学生に一つ一つの接続詞の用法や一つ一つの関連性が適切か否かを考えさせることができる。
- 2) 構成とか、因果関係とか、論文に対して、大切な要素と思います。
- 3) 卒業論文を書く時に自分が考えたことだけに夢中になり、完成さえすればよいと思っていましたが、結局他人が読んでわかりにくい部分がたくさんありました。今日の授業を通して、まず自分が何を考えるべきかに気づきました。

3.3 本教材が持つ課題

タスク活動を備えた本教材を用いた課外での自己学習の可否については、24名中20名が「できる」、4名が「難しいと思う」と回答した。後者の困難を感じる学習者のコメントには、「先生がいないと解決しない問題もあるかもしれない」「外国の学生にとって（中略）専門家の指導を受ける必要がある」等の記述が見られ、担当者に直接支援を受けられる機会が要望されていた。すなわち、本教材を独習するには不安があるということである。

今後、本教材を用いた学習を可能にし効果を上げるには、学習上の不安を軽減しなければならない。まず、学習者の母語による「解説」を提供し、その効果を検証する必要がある。次に、タスク前の「導入」として学習者の母語による文章例の分析活動を考案し、その効果を検証したい。これには母語話者教師との連携が必要になる。さらに、素材文についての綿密なグロッサリーなど、直接的な支援材料を提供する効果についても検討したいと考えている。

上記の支援方法によりどの程度の学習段階から本教材のような活動が可能になるかを認識して、アカデミック・ライティングを必要とする学習者になるべく早い段階から支援を提供する方法を開発したい。

4. おわりに

今回の実験授業と調査の結果分析から、タスクによる教材の有用性が認められ、それらの授業実践も一定の評価を得たと結論できる。今後、教材のさらなる改良と、国内外での実践や調査を継続したい。

(tmuraoka@ciee.osaka-u.ac.jp)

付記：本研究は、研究費補助金基盤研究(B)（「学習者の多様な背景に着目した論文スキーマ形成型日本語文章作成支援に関する実証研究」課題番号25580113）の助成を受けた。

参考文献

- 1) 村岡貴子, 因京子, 仁科喜久子: 論文作成のための文章力向上プログラム -アカデミック・ライティングの核心をつかむ-, 大阪大学出版会 (2013)
- 2) 村岡貴子, 因京子, 仁科喜久子: 専門日本語文章作成支援方法の開発に向けて: 論文スキーマ形成を中心に, 専門日本語教育研究, vol.11, pp.23-30 (2009)

引用から解釈に至る引用文の多様性

—人文・社会科学系資料分析型論文指導のための基礎的研究—

Varieties of Citations from Quoting to Interpreting

in the "Literature-analysis-type" Papers in Humanity and Social Science

○山本 富美子^{※1} 二通 信子^{※2} 大島 弥生^{※3} 佐藤 勢紀子^{※4}
YAMAMOTO, Fumiko NITSU, Nobuko OSHIMA, Yayoi SATO, Sekiko

キーワード：アカデミックライティング、論文指導、論理的展開構造、カテゴリー、プロトタイプ
Keywords: academic writing, instruction for writing research papers, logical discourse structure of research papers, categories, prototype

1. はじめに(背景および目的)

佐藤他(2013)では、人文・社会・工学系論文 270 本の構造型を調べた結果、文学・社会学・経済学の論文には資料の引用・解釈によって論述を展開する「資料分析型」論文が、それぞれ 90.0%、53.3%、66.7%と、多かったことを報告している。当該分野を専攻する留学生は多く、日本語による論文執筆への要請も他分野に比較して高いことから、その引用・解釈構造を究明することは喫緊の課題であると言える。

引用に関する研究には、発話資料を中心とした砂川(1989)、中園(2006)、藤田(1986)などがある。しかし、論文については引用の形式・引用方法などを中心とした研究が主で、引用・解釈による論理展開構造に着目した研究は少ない。そこで本研究では、論文筆者が原資料をどのように引用・解釈し論理展開しているのかに着目し、本発表ではまず論文中の引用文のタイプについて分析・考察する。

2. 方法

佐藤他(2013)で、文字・図版の質的資料のみを引用・解釈することで論理展開している「資料分析型」と判定された論文のうち、文学、社会学、経済・経営学の各雑誌から当該論文の占める比率に応じて、論文掲載順に 10 本選び、分析対象とした。『日本文

学』2 本、『日本近代文学』3 本、『社会学評論』3 本、『日本経営学会誌』1 本、『アジア研究』1 本である。これらの序論・本論・結論の全文から、筆者が原資料の引用・解釈を通して論理展開している文を抽出し、意味的・形式的に共通・類似するカテゴリーに分類してラベル付けした。

3. 結果および考察

分析の結果、引用を含む文は、A「中立的引用文」、B「解釈的引用文」、C「引用解釈的叙述文」の 3 種に分類されることが判明した。本発表では、これら 3 種の引用文について、それぞれの例を挙げ、特徴を述べる。

A「中立的引用文」は、「～ハ/ニヨレバ+直・間接引用部+ト+特定の引用動詞」の形式を持つ。

例 1: (子規は)「俳句問答」(明治 29 年)では、「立冬より…。故に太陽暦の新年には…。」⁽⁴⁾と述べている。〈近文 1〉

例 2: パーソンズによれば、デュルケムは…、…を抱えているという(Parsons[1937]1949:318-20=1989:26-30)。〈社 1〉

A「中立的引用文」では、論文筆者の解釈を排除して引用部の内容をありのままに伝達し、当該文または前後の文で出典を明示している。特定の引用動詞とは「引用句との共起が必須」(砂川 1989:363)で、発語行為のみの遂行を担う中立的な動詞「いう」(中園 2006)、および「述べ立て」という発語内行為を特定する「述べる/記す」などの特定の動詞に限られる。

B「解釈的引用文」は、「～ハ/ニヨレバ+直・間接引用部+ト+解釈的述部動詞」の形式で、述部に論文筆者の解釈が含まれている文である。解釈的述

※1 武蔵野大学大学院言語文化研究科教授

※2 室蘭工業大学大学院工学研究科非常勤講師

※3 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科准教授

※4 東北大学高等教育開発推進センター教授

部動詞とは、引用句との共起は必須ではなく、発話の引用研究における「文字通りの発話の力と異なった発話の力」を持ち「引用者の主観的な判断や評価が介在」（砂川 1989:369）する動詞、発話の「発言・思考という事態」と「それとは別の事態」で「何らかの根拠のある結びつきによって同一場面的に共存する関係を成り立たせている」動詞（砂川 1989）を指す。これらの動詞により論文においても「事態共存型」引用文（藤田 1986）と同質の、原資料と論文の中の二つの事態が共存する引用文が成立すると言える。B は引用内容により次の下位カテゴリーが認められる。原著者または原著内の人物の 1) 言語行動、2) 思考、3) 位置づけ、4) 心的態度、5) 背景的状况、および原著内の 6) 事柄の引用描写に筆者の解釈が介在する引用文である。以下プロトタイプ例を示す。

- 1)坪内逍遙は「小説の範囲は演劇の範囲よりも広く…、…頗る広し」(『小説神髓』)と指摘する。〈近文 2〉
- 2) この箇所ではカッシーラーは、「感性」と「知性」(悟性)を二元論的に扱うのではなく、…べきだと主張している。〈近文 3〉
- 3)「寿永記」では武家政治の確立が(源九郎)(源義経)によってなされたとされているが、…。〈文 2〉
- 4)保田は「滑稽を叙して切に人間の至情にふれ、…ところは、当代に類ひない一人者である」と井伏を賞賛し…。〈文 2〉
- 5)蔣の不信の根底には「上海および南京特別市党部は…甚だしい。」という当時の地方党部の状況があった。〈ア研〉
- 6)Maslow によれば、両者の違いは前者は他者によって動機づけられるが後者はそうではないという点である。〈経〉

C「引用解釈的叙述文」は、論文筆者が原著者、原著内の人物に寄り添い、その言語行動、思考、心理、行動、背景などを筆者自身の解釈を通して叙述している文である。A、B のような引用標識「ト」がなく発話の引用研究では除外されているが、論文では原資料以外からは知り得ない情報が記述されており、引用文の一種であると位置づけられる。下位カテゴリーとしては B の 1)～6)に加え、7)原著者、原著内の人物の行為の解釈的叙述が認められる。

- 1)雌のほう繁殖への投資が大きい生物において、雄のほう体が大きかったり派手な体色をもっていたりすることが、こうして説明される。〈社 2〉
- 2)デュルケムによれば、近代においては、暴力による強制や

従属関係よりも、～が選ばれる傾向にある。〈社 1〉

- 3)Maslow の自己実現人は(Maslow によって)欲求階層の最上位に位置づけられる。〈経〉
- 4)源氏は出家を実行することは、まだ幼い紫の上の存在もあり躊躇している(19)。〈文 2〉
- 5)「賢木」から「須磨」にかけての源氏は、桐壺帝という後ろ盾を失い、蟄居・流罪の身であった。〈文 2〉
- 6)(原著者の)レイプの概念は、被害者の女性が誰のものか、あるいは…かといったことと密接に結びついていた。〈社 2〉
- 7)胡漢民はこれまで中央執行委員会に従属していた中央政治会議を、…として新たな制度配置を行った。〈ア研〉

4. おわりに

これまで日本語の論文指導では、A と、B の一部の引用文の形式と方法が中心を占めてきたと思われる。しかし、量的には A はこれら引用文全体の 1 割に満たず、B は 3 割、C は 6 割を占める。また、直接引用は A には多いが、B は 4 割、C は間接引用が大半を占める。このことから、A より B、さらに C の引用文に筆者自身の解釈がより多く含まれ、B、C の引用・解釈文の効果的指導が人文・社会科学系「資料分析型」論文指導の重要な鍵を握っていると考えられる。

今回研究対象としなかったが、この他に、引用部のない筆者の解釈のみの文がある。この解釈のみの文と引用・解釈文との構造的関連性および指導法については今後さらに分析を重ね、別稿に譲りたい。

(メールアドレス f_yama@musashino-u.ac.jp)

参考文献

- 1) 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子, 学術論文の構造型とその分布, 日本語教育 154 号,85-99,2013
- 2) 砂川有里子, 引用と話法, 講座 日本語と日本語教育 4, 355-387, 明治書院,1989
- 3) 中園篤典, 発話行為的引用論の試み, ひつじ書房,2006
- 4) 二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子, 原資料解釈部分における談話の展開, 第 15 回専門日本語教育学会研究討論研究会誌, 2013.
- 5) 藤田保幸, 文中引用句「～ト」による「引用」を整理する, 宮路裕編,論集日本語研究,206-230, 明治書院, 1986

自己PR文を推敲する日本人大学生の修正意図の分析

Analyzing the Intention of Japanese Students for Revising Their Self-Promotion Statements

○古本 裕子^{※1}
FURUMOTO, Yuko

○近藤 行人^{※2}
KONDOO, Yukihiro

キーワード：就職活動、エントリーシート、自己PR文、推敲、具体化

Keywords: job hunting, job application form, self-promotion statement, revision, concretization

1. はじめに

エントリーシートに自己PR文を書くことは、就職活動をする大学生にとって、必須の文章作成作業であり、多くの学生が内定に辿り着くまで、何度も書き直しを余儀なくされている。自己PR文は「自分自身について説明し、相手が自分に対してよい印象を持つように促す文章」である。客観性、論理性を重視したアカデミックな文章とは違う側面を持ち、学生にとって難しい課題である可能性がある。

自己PR文が課されることの多いエントリーシートについて、小島(2010)は学生の記述を分析し、その書き方に関する準備活動を行うことが豊かな記述に結びつく場合があることを示唆している。しかし、何度も書き直す自己PR文の推敲に焦点を当てた研究はなく、解明の必要がある。そこで、本発表では、自己PR文を日本人大学生が推敲する際の修正意図を、質問紙の自由記述から分析する。

2. 方法

分析対象者は、発表者の1人が工学系大学で行った「自己PR文を書こう」という授業に参加した、日本人大学生46人である。授業1週間前に、「大学で力を入れたこと」というテーマで、200字の自己PR文をエントリーシートのつもりで書くように指示した。授業では、よい自己PR文とは何かについて意識化させることを狙い、講師が示した自己PR文について、よいと思う順位をグループで話し合う活動や、講師による自己PRとは何かについての解説を実施した。授業後、自己PR文第1稿を自己修正させた。その際、自己PR文の修正部分と、修正の理由について、質問紙への自由記述を求

めた。その結果、第1稿、第2稿各46編と、「修正部分」「修正理由」の記述、それぞれ130が得られた。学生の実際の修正意図として「修正の理由」に書いた記述を分析対象とするが、「修正部分」の記述も参考にする。得られた修正意図はその特徴を基に帰納的に分類し、コード名を付した。なお、1つの記述に対し1つのコードを対応させた。コード名および分類は発表者2人で協議し決定した。

3. 結果および考察

表1に、コード名および定義、修正意図がそのコードに分類された実人数と、その人数が分析対象46人に占める割合を示す。まず、学生の修正は【削除・簡潔化】と【追加・変更】の2つに分けられた。【削除・簡潔化】として22人(47.8%)が第1稿で書いた内容を減らしたと記述した。どのように【削除・簡潔化】したかについては、[内容の絞り込み]12人(26.1%)、[簡潔化]10人(21.7%)、[文字制限の考慮]3人(6.5%)に挙げられた。学生は、200文字という厳しい文字制限の中で、書かれた一部を減らすことで、効果的に自己PRするスペースを確保しようとしている。

【追加・変更】は、45人(97.8%)と、ほぼ全ての学生が言及していた。このうち、78.3%の学生が挙げた〈内容自体の工夫〉では、それぞれ40%程度の学生が[主張・価値観・人物・能力のアピール]、[経験・行動内容明示]、[成果の明示・経験による成長]に言及していた。また、5人(10.9%)と少数ではあるが、[力を入れた活動の理由や意識の明示]の意図も確認できた。学生は様々な修正意図をもって内容の【追加・変更】を行い、読み手である企業の採用担当者に、自分をより強く印象づけようとしていると考えられる。

※1 名古屋学院大学留学生別科非常勤講師

※2 名古屋大学国際言語文化研究科博士後期課程

〈内容自体の工夫〉に対し、〈文章をよくする工夫〉は、21人(45.7%)が挙げた。その内訳は[書き始めなど構成の工夫] (6人、13.0%)、全体を時間軸に沿わせる、ストーリーにする [プロセスの強調] (4人、8.7%) など、構成に関する修正意図のほか、[丁寧な書き言葉・文体]に整える意図(7人、15.2%)が見られた。意味が間違いなく伝わるよう修正する[意味の調整]の意図も確認できた。

表1 自己PR文の修正意図の分類と出現人数・割合

注1

【削除・簡潔化】 文章や部分を削除して、スペースを確保する意図、または、簡潔にする意図 22人(47.8%)	
[内容の絞り込み] 12人(26.1%)	重要性が低い部分を削ることによって、重要性が高い部分を詳細化、具体化する意図。
[簡潔化] 10人(21.7%)	冗長部分、繰り返しになっている部分、適切でない部分を削除する意図。
[文字数制限の考慮] 3人(6.5%)	文字制限を意識して、文章や文の一部を削除する意図。
【追加・変更】 文章を追加・変更する意図 45人(97.8%)	
〈内容自体の工夫〉 書かれる内容を工夫する意図 36人(78.3%)	
[主張・価値観・人物・能力のアピール] 18人(39.1%)	筆者の価値観や主張、人物像・能力を示す意図。
[経験・行動内容明示] 19人(41.3%)	経験や、自分の行った行動を明示的に書く意図。
[力を入れた活動の理由や意識の明示] 5人(10.9%)	活動に力を入れた理由や、行動している時の意識を明示的に書く意図。
[成果の明示・経験による成長] 17人(37.0%)	経験から得られた成長や変化を示す意図。成果・結果を明確に示す意図。
〈文章をよくする工夫〉 文章の構成や文体など文章をよくする意図 21人(45.7%)	
[書き始めなど構成の工夫] 6人(13.0%)	重要なものを最初に書くなど、構成に関する工夫をする意図。
[プロセスの強調] 4人(8.7%)	提示の順を時間の流れに沿ったものにし、時間の流れ、プロセス、ストーリー性を強調する意図。
[丁寧な書き言葉・文体] 7人(15.2%)	文体を「です」「ます」体にする、略語をやめるなど、丁寧な印象を与える意図。
[意味の調整] 5人(10.9%)	誤解を受けそうな部分を変更したり、重点がわかる書き方に変更する意図。
[具体化・明確化] 3人(6.5%)	文章全体を具体化する・明確化する意図。
[その他] 4人(8.7%)	

[具体化・明確化] (3人、6.5%)は、具体化・明確化する対象が特定されていない記述を書いた学生である。「行動の理由を具体的に書く」、「結果を明確に書く」など、対象を特定した記述は20人(43.5%)がしているが、これらは〈内容自体の工夫〉に分類されている。学生が一度書いたPR文を書きなおす過程で、単に力を入れた事実を列挙するだけでは自己PR文として機能しないことを自覚し、具体的に書く、内容を明確化するという意図が表れたと考えられる。

自己PR文では、内容に関する情報は自分自身の中にある。振り返りや内省をすることで、内容の推敲が強く促され、同時に、その内容の効果的な提示を意図して、文章をよくする工夫も促されていると推測される。

4. おわりに

本発表は、自己PR文の修正意図を、質問紙の自由記述を分類し、コード化して分析した。その結果、工学系日本人大学生は、様々なメタ認知的方略を用いて修正する推敲活動を行っていることが明らかとなった。

ただし、実際の自己PR文の修正が意図通りに実現しているか否かの検討は、今後の課題とする。「大まかな内容だったので、より具体的にした」という修正意図を挙げた学生の自己PR文は、十分に具体化されているとは言えなかった。

さらに、書き手が修正する際に、自身の書いた文章の問題や課題を分析し、それをコントロールすることを支援する方法を検討していきたい。

注

注1 1人の学生の回答が複数で、同じコードに属するものがある場合は、そのコードに属する回答が1人に見られたとして計算した。

参考文献

- 1) 小島弥生:就職活動におけるエントリーシートへの記述に関する探索的研究—志望する職種との関連の検討—, 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇, Vol.10, pp.89-98 (2010)

演習発表型授業でのレジュメにおける問題点の考察

—留学生と日本人学生のアカデミック・スキルに注目して—

Issues of Resume Writing for Academic Presentations in Japanese:

Focusing on Academic Skills of Foreign Students and Japanese Students

○深川 美帆^{※1} 深澤 のぞみ^{※2}
FUKAGAWA, Miho FUKASAWA, Nozomi

キーワード：アカデミック・スキル、レジュメ、口頭発表、留学生、日本人学生

Keywords: academic skills, resume, oral presentation, foreign students, Japanese students

1. はじめに

日本の大学で専門分野について学び単位あるいは学位を取ろうとする留学生は、日本人学生と共に専門分野の講義や演習などの授業活動に参加し課題を遂行する力が求められる。これまでのアカデミック・ジャパニーズ研究においては、論文やレポートの書き方などについての研究や教育は多くなされてきた。しかし、こうした学生の多くが履修する演習形式の授業で頻繁に作成する必要に迫られるレジュメ作成についての研究はあまりなされておらず、これについて取り上げた教材も少ない。また、現状の日本語教育でもレジュメ作成の具体的な指導はあまり行われていない。レジュメは、アカデミックなジャンルでの文章媒体であるという点ではレポートや論文と共通しているが、形式や文のまとめ方には独自の特徴があるため、それらについての知識やスキルがなければ学習活動において求められる要件を満たすようなレジュメを作成することは容易ではない。そこで本発表では、レジュメ作成に求められる条件を明らかにした上で、演習形式の授業で作成したレジュメにおいてどのような問題があるかを留学生（日本語学習者）と日本人学生を対象に分析し、その結果からアカデミックな場面における日本語教育にどのような教育・支援が必要かを明らかにする。

2. レジュメについての定義

まず、レジュメというものを明確にするために、既刊の大学生向けのアカデミック・スキルに関する

教材・参考書でレジュメについての説明や記述を調べた。それらをふまえ、本発表では、レジュメとは、「『要約』『摘要』とも呼ばれ、大学の演習形式の授業などで発表する際に用いられる、口頭発表を補完する文字による説明資料である」と定義する。

3. 方法

本発表では、日本国内の大学生・大学院の人文・社会科学系分野を専攻とする日本人母語話者と上級日本語学習者が作成したレジュメを分析し、それぞれにどのような特徴が見られるかを調べた。

3.1 分析の観点

分析にあたり、レジュメに求められる条件を、上述のアカデミック・スキルに関する教材の記述をもとに以下のように定義した。

- (1) レジュメを用いて行われる発表の論理構成が整理して示されていること。
- (2) 客観的事実に基づき、論理的に説明や考察がなされていること。
- (3) 引用が適切に行われていること。また、その出典が明確に示されていること。
- (4) 情報が過不足なく要点を絞って簡潔に、かつ視覚的にもわかりやすく示されていること。
- (5) 全体の分量が発表時間や内容に合った適切な分量であること。
- (6) 正確な語彙・表現が用いられていること。

これらのうち(1)(2)(3)(6)は、レジュメに限らず、レポートや論文などにも共通するものである。レジュメの特徴としては口頭発表を補完する視覚資料という役割から、(4)や(5)といった条件も求められ

※1 金沢大学国際機構留学生センター准教授

※2 金沢大学人間社会学域国際学類教授

る。また、(6)は特に留学生の場合に日本人学生の場合とは異なる誤用や問題があると予想される。分析方法は、対象とするレジюмеを上述の条件をもとに分析・分類し、問題となる箇所の特徴を記述した。

3. 2 分析資料

対象とするレジюмеは、2012年から2013年にかけて日本国内の大学で大学学部3年生を対象とした演習授業で発表されたレジюме81本で、日本語母語話者のものが66本、留学生(N2レベル以上の日本語学習者)のものが15本である。内容は自分自身の日本語や日本文化に関する卒業論文のテーマを絞り込むことを目的に、関連の先行研究をまとめたものが多い。レジюме作成者のうち日本人学生は、大学1年次に初學者教育としてレジюмеの書き方の基本的指導を受けた経験があるものの、実際に自分の発表のために書いた経験がほとんどない。留学生は、以前に日本語のレジюмеの書き方についての授業を受けたことがない学生たちである。

4. 結果および考察

分析の結果、留学生、日本人学生ともにほとんどのレジюмеで、上述の条件(1)から(6)のうちいずれかについて問題があった。

まず全体的な問題について述べる。顕著に見られたのは、「(3)引用」に関するものである。妥当な分量以上に引用が記されている例(直接引用がレジюмеの大半を占める例で、留学生に多い)や、引用部分と発表者自身の考えとが明確に分離されていない例、引用箇所の適切な提示がない例(日本人学生にも多い)が見られた。これについては、従来からの指摘の通りである。また、「(1)発表の論理構成」においても問題が見られた。アカデミック分野におけるテーマ設定の失敗やレジюме内での論理の不足、また適切な情報収集ができていない問題であり、これも留学生と日本人学生双方に見られた。

次に、個別の問題について述べる。目立ったのは日本語についての問題である。留学生のレジюмеでは、当然であるが文法や語彙の誤りや書き言葉と話し言葉の混在などの「(6)正確な日本語」の問題が多く見られた。ア)は話し言葉の使用例、イ)は文末の誤用の例である。

ア) こんな強い影響力を持つテレビ放送.. (F7) 注

イ) ...との比較も考えながらやりたいである。(F5)

加えて今回の調査の結果で特徴的だったのは、アカデミックのジャンルに適した語彙・表現の選択ができないことであった。このような例は日本人学生のレジюмеにも見られた。ウ)とエ)に例を示す。

ウ) オノマトペを探しておきたい。(F14)

エ) ...できるか微妙である。(J46)

また、オ)カ)のような話し手の主観を示す内容や表現(モダリティ表現等)も目立った。

オ)「焦げる」からくらしい。(F14)

カ) ...という点では残念な気がする。(J46)

他には、いわゆる文のねじれや、読点が適切に使用されていない例なども多く見られた。

5. おわりに

以上のことから、留学生と日本人学生ともに上述のようなアカデミックな場面で求められるスキルについて、学習者に理解可能な形で提示され指導されることが必要であることがわかった。

今後はその教育方法について研究を進めていく予定である。

(mihofk@staff.kanazawa-u.ac.jp)

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「アカデミック Can-Do グリッドに基づく日本語教材モデルの設計」(課題番号 25370586)の助成を受けて行われたものである。本研究においては札幌寛子氏、濱田美和氏の協力を受けた。

注

()はレジюме番号でFは留学生、Jは日本人学生。

参考文献

- 1) 佐藤望 [他] 編著:アカデミック・スキルズ - 大学生のための知的技法入門 - 第2版, 慶應義塾大学出版会 (2012)
- 2) 学習技術研究会編著: 知へのステップ 第3版, くろしお出版 (2011)
- 3) 北尾謙治 [他] 著:広げる知の世界—大学でのまなびのレッスン, ひつじ書房(2005)
- 4) ノートルダム清心女子大学人間生活学科編: 大学生のための研究ハンドブック—よくわかるレポート・論文の書き方, 大学教育出版 (2012)

卒業論文作成が論文スキーマ形成におよぼす効果

— 日本人大学院生による作文の自己訂正の観察から —

Influence of Thesis-Writing on Schema Formation of Academic Writing:

Observation of Revision by Japanese Students after Thesis-Writing

○山路奈保子^{※1} 因 京子^{※2} 藤木 裕行^{※3}

YAMAJI, Naoko

CHINAMI, Kyoko

FUJIKI, Hiroyuki

キーワード：論文スキーマ、卒業論文、修正意識、自己修正

Keywords: schema of academic writing, thesis, consciousness for revision, revision

1. はじめに（背景および目的）

本研究は、日本語母語話者が大学教育を通じて論文スキーマを形成していく過程を明らかにすることを目的とする。学部学生の日本語表現能力については、新入生対象のライティングコースでの観察を中心に報告例があるが（因・山路 2009、大島 2010 など）、レポート・卒業論文執筆等の経験による日本語表現能力の長期的変化を観察した研究は少ない。本発表は、卒業論文作成経験が論文スキーマ形成におよぼす影響を、論文作成前と作成後に書かれた同一主題の作文とそれらへの自らのコメントの比較から探った結果を報告する。

2. 方法

作文課題は、「札入れ部分が二つに分かれている財布に1000円、5000円、10000円の3種の札をどのように入れるのが最も合理的か、理由とともに述べなさい」というものである。調査対象者は、筆者のうち2名の所属する大学の工学部機械系学科に2009年に入学し、2013年に同大学大学院博士前期課程に進学した日本語母語話者の学生である。2011年4月に3年次必修科目「コミュニケーション技法」第1回講義において、講義の終了前20分程度でこの課題で作文を書き（作文1）、同講義の最終回においてその作文を見直して自らコメントを付したうえで（「修正コメント1」）、自己修正を行った（作文2）。

その後、大学4年次に卒業論文を作成して大学院に進んだ25名に対し、進学直後に作文1と作文2を返却して、作文2の問題点にコメントを施し（「修正コメント2」）、且つ、同主題の作文（作文3）を作成するよう求めた。本発表では、被験者の修正における意識を知るために、提出された24名分の修正コメント2を分析し、卒業論文執筆経験の影響を観察するために、同じ24名の作文2と3を比較する。

3. 結果および考察

修正コメントには、根拠の弱さや説明不足の指摘（11名）、書き言葉を含めたより適切な語・語句への修正（11名）、文の冗長さの指摘（8名）が多く見られた。思考と言語表現の両面で厳密さ・明確さへの意識が強化され、簡潔な表現への志向が高まったことが窺われた。

作文全体の文字数の平均は、作文2が266.3、作文3が316.7であった。段落数は、作文2では段落分けを全くしなかったのが多く見られたが、作文3では3段落または4段落としたのが多く（表1）、内容のまとまりに対応する段落を形成する必要があることへの意識が高まったことが窺われた。

全体構造を見ると、いずれも「主張—根拠—主張」という構造をとったものが最多であったが（表2）、作文3では「～について考察する」といった「宣言」や、「現在、日本には1000円、5000円、10000円の3種類の札がある」といった「前提」を付加したものが増えた（表2）。冒頭に背景と目的を述べるといった論文の形を踏襲したものと考えられる。

※1 室蘭工業大学国際交流センター准教授

※2 日本赤十字九州国際看護大学看護学部教授

※3 室蘭工業大学大学院工学研究科もの創造系領域教授

表1 段落数 (数字は人数)

	作文2	作文3
1段落	7	4
2段落	5	3
3段落	5	9
4段落	4	6
5段落以上	3	2

作文3では、「宣言」の箇所以外にもメタ言語表現を使用した例が増加していた(6名)。冗長な表現や重なりが作文3では作文2よりも少なくなり、一文あたりの字数が作文2と比較して10%以上減ったものが10例あった。ただし、主張を述べる最後の文は長くなる傾向があり、作文2、3とも、末尾に主張をおいた16例のうち12で字数が増加しており、要点を漏らさず一文にまとめていた。

「根拠の説得力」という点では、作文2と3との間に大きな違いは観察されなかった。しかし、「どのような状態が実現/解消すれば合理的と言えるか」といった議論・判断の前提や判断基準を作文3において新たに示したものやより精密に記述したものが多く見られ(11名)、主張に至るまでの推論の各段階の意識の精緻化、および、それを読者に示す必要性の認識が進んだことが窺われた。

表2 全体構造 (数字は人数)

構造	作文2	作文3
主張-根拠-主張	8	7
主張-根拠	3	4
根拠-主張	3	0
宣言-根拠-主張	3	4
宣言-主張-根拠-主張	2	1
前提-主張-根拠	1	0
宣言-主張-根拠	1	0
主張-前提-根拠-主張	1	1
根拠-主張-補足	1	0
宣言-根拠-主張-補足	1	0
前提-宣言-根拠-主張	0	2
宣言-前提-根拠-主張	0	1
前提-根拠-主張	0	1
前提-宣言-主張-根拠-主張	0	1
前提-根拠-主張-根拠-主張	0	1
根拠-主張-補足-主張	0	1
宣言を含む	7	9
前提を含む	2	7

表3 学生による作文の例

作文2
1000円、5000円、10000円、この3種類の札の最も合理的な分け方は、1000円の組と5000円・10000円の組で分ける方法である。日常生活の中で最も多用する1000円とあまり使用しない5000円、10000円に分けることで、 <u>買い物の際札を探すという行為を短縮することができる。</u> よって、この分け方が最も合理的である。
作文3
現在、日本には千円札、五千円札、一万円札、計三種類の札がある。我々はこれらの札を携帯する際、財布を用いる。財布の構造として、我々が一般的に使用するものは、札入れ部分が二つ付いている場合が多い。 この札入れ部分に関して明確な使用方法が記載されている文献等は存在しない。そこで、札入れ部分について考察し、札の合理的な分け方を検証してする。(筆者注：原文ママ) <u>検証方法として札の使用頻度の観点から注目する。三種類の札の中で最も頻繁に使用するものは千円札であり、次に五千円札、一万円札の順に続く。つまり、財布の出入りが最も多い札は千円札である。</u> このことから、 <u>使用頻度の高い千円札と他の札を同じ箇所に入れると財布から千円札を取り出す際に不便となる。</u> よって、千円札を財布の札入れ部分に独立させて入れる方法が最も合理的であると言える。

表3に、ある1人の学生の変化を示す。構造は「主張-根拠-主張」から「前提-宣言-根拠-主張」へと変わり、メタ言語表現を使用している(下線部)。また合理性の判断に関する記述が、十分とは言いがたいが、作文2に比べて精密になっている(点線部)。

4. おわりに

卒業論文作成後の作文には、語彙の選択や使用方法には生硬な部分が依然として見られるものの、議論展開や表現の精密さに対する意識の向上が見られ、スキーマ形成が進んだことが示唆された。

(yamaji@mmm.muroran-it.ac.jp)

参考文献

- 1) 因京子・山路奈保子：日本人学部1年生の論文構造スキーマ形成過程の観察，専門日本語教育研究，第11号，pp.39-44 (2009)
- 2) 大島弥生：大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試み—ライティングのプロセスにおける協働学習の活用へ向け—，京都大学高等教育研究，第16号，pp.25-36 (2010)

第16回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2014年3月1日発行

© 専門日本語教育学会 2014

北九州市立大学基盤教育センターひびきの分室
池田研究室気付

〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1

TEL: 093-695-3228 FAX: 093-695-3328

発行：第16回専門日本語教育学会研究討論会実行委員会

副島健治（委員長）、鎌田倫子、濱田美和、
深澤のぞみ、三浦香苗

印刷：とうざわ印刷工業株式会社

TEL: 076-466-2711

富山市婦中町広田 5210

専門日本語教育学会